

コロナ禍を逆手にとり 個室で受付から会計までを 完結

File1 もいわこどもクリニック
大柳尚彦院長

2021年11月オープン。コロナ禍という逆境を逆手にとり、待合室を設けず8室の個室で診療から会計まで完結できる診療スタイルを確立。患者同士が交わらない徹底した感染対策で、安全・安心な医療を提供する。



おおやなぎ・なおひこ ● 1999年、岩手医科大学医学部卒業。札幌医科大学小児科学教室入局、市立函館病院や滝川市立病院、医療法人社団白石こどもクリニックなどを経て、2021年11月に開業。

開業経緯

「患者さん一人ひとりに対する診療の責任を全うしたかった」。これが開業した一番の理由です。

開業前に勤務していた診療所は複数医師体制だったため、大勢の患者さんのニーズに応えることができた一方で、受け持ちの患者さんを一貫して診ることができないことにもどかしさを感じていました。併せて、感染対策を徹底した、これまでにない診療所をつくりたいという想いもありました。

コロナ禍での開業には不安が大きかったのですが、次第に「今だからこそ個室診療のメリットを打ち出せる」と確信が変わっていきま

開業地の選定

札幌市内の中心部で開院したいという気持ちもありましたが、構想していたのは個室が複数ある診療所であり、それなりのスペースが必要となります。なおかつこの地域では、電車よりも小児科は車で来院する方が多い。そこで初期投資も考えて、中心部から少し離れたエリアに新設された医療モールを選びました。

中心部ではありませんが、周辺には大型のショッピングモールがあつて家族連れでにぎわうエリアです。開院準備を進めていた1年間で近隣の小児科診療所が2つも閉院するという状況もあり、結果的に小児科ニーズの高いエリアとなりました。

診療スタイル

一番の特徴は待合室を設けずに、8つの診察室で受付から会計まで完結するスタイルです。他の患者さんと交わらないため、感染リスクを大幅に下げることができ

ます。コロナ禍を経験し、患者さんの意識も高まっています。徹底した感染対策は医療の質を担保するうえで、重要な取り組みであり、「特徴」だと考えています。処置室を取り囲むように並んだ診察室を、私が順繰りにまわって診察

プブノート

小児科かかりつけ患者と家族を対象とした専用アプリ「プブノート」は、コンサルティング会社の株式会社クランバースが2019年にリリース。熱の経過をグラフ化した熱型表機能や皮膚症状の画像のほか、ハイハイやつかまり立ちといった成長も記録できる。細かな記録によって、より適切なアドバイスや診断につなげるねらいがある。さらに医療機関からタイムリーな医療情報も発信が可能。全国の病院や診療所など約80施設で活用されている。



プブノートの画面



色分けされた個室

人材採用・管理等

スタッフは、看護師2人、事務員2人、医師は私のみです。何とか今の患者さんに対応できる人員です。

より多くのニーズに対応していくためには医師の増員という選択肢もあるかもしれませんが、それでは、一貫した診療という開業の目的を果たせなくなる恐れがあります。そのため当面はこの体制で役割を果たしていくつもりです。

設備・システム

予約システムの「check on」(株式会社エヌオーシー)を導入しています。予約時にある程度の問診情報を収集できますし、いろいろとカスタマイズ性も高いことから選びました。兄弟を伴って来院するといった情報もこの時点でわかるため、個室の割り振りもスムーズになります。

この予約システムは、お子さんの自宅での症状や成長記録を共有できるアプリ「プブノート」と連携しており診察券も必要としませ

コンサルタント

プブノートの開発も手掛ける株式会社クランバースの山崎雄吉さんに依頼しています。前職のときから知り合いだった縁でこの医療モールも紹介してもらい、今に至っています。内装やホームページのデザイン、人材採用まで幅広くサポートいただいたおり、事務長と同じような役割を担ってもらっています。山崎さんがいなかったら開業はしなかったと思います。

集患策

医療モール壁面のデジタルビジョンでオープン情報を流したの

今後の展望等

開業から1年程度で経営が安定したのは、想定外でした。そのおかげで、当朝6時30分までの予約を受け付ける、当日予約枠も設けられるようになりました。夜間に体調不良になった患者さんもある程度カバー可能となり、かかりつけの患者さんにとって良かったと思っています。

あとは、個室スタイルは医師や看護師側が行ったり来たりして診療するため、案外、1日に診られる患者さんが限られてしまっ面があります。効率性も高めながら、長く地域に貢献できればと考えています。

札幌市内の中心部で開院したいという気持ちもありましたが、構想していたのは個室が複数ある診療所であり、それなりのスペースが必要となります。なおかつこの地域では、電車よりも小児科は車で来院する方が多い。そこで初期投資も考えて、中心部から少し離れたエリアに新設された医療モールを選びました。